

【資料】

沖縄県宮古島市大神島における観光地化と住民意識  
——2014年と2018年の比較——

堀本雅章

(法政大学沖縄文化研究所)

Changes on Perception of the Residents on How to Attract Tourists at Ogami Island,  
Miyakojima City, Okinawa Prefecture between the Years of 2014 and 2018

HORIMOTO Masaaki

(Institute for Okinawan Studies, Hosei University)

Abstract

In recent years number of visitors has increased in Okinawa Prefecture. Similar example can also be observed in some marginal island such as Ogami Island Miyakojima City Okinawa Prefecture. The author has carried out research on perception how to attract the Ogami Island in the years of 2012 and 2014. Both years showed no specific attitudinal changes. The third investigation was carried on September 2018 and found that some opinion to reduce a certain number of tourists. They thought certain types of tourists did not attract the islanders. However, a new type of sightseeing activities developed. Snorkeling visitors have appeared to increase and they activate sightseeing industry demanding some daily goods as well as making eateries busy. On the other hand, the opening of the dining room was not only become convenience for a tourist, but also the role of the place of recreation and relaxation for residents.

キーワード：住民意識，入域観光客数，シュノーケリング，食堂，大神島

Keywords: residents' perception, number of visitors, snorkeling, dining room, Ogami Island

I. はじめに

近年の離島ブーム、観光の形態や人々の嗜好性の多様化などから、小規模離島で入域観光客数が増加する場合がある。例えば、小規模離島の沖縄県宮古島市大神島（図1）で入域観光客数が、2008年から2018年の間に約1.91倍に増加した。しかしながら、大神島唯一の大神集落は、典型的な限界集落である。

大野（2008）は、限界集落とは、65歳以上の高

齢者が集落の人口の半数を超え、冠婚葬祭をはじめ田役道役などの社会的な共同生活の維持が困難な状況にある集落と位置付けた<sup>1)</sup>。

本稿で取り上げる大神島大神集落は、調査当時の2018年9月現在人口21人まで減少し、住民の過半数が80歳以上、最年少が50歳代である。集落の行事である海の神様を祭る「海神祭」、年数回の島の大掃除には、宮古島出身の子どもらを含むボランティア団体の協力で何とか地域の行事を継続できている<sup>2)</sup>。

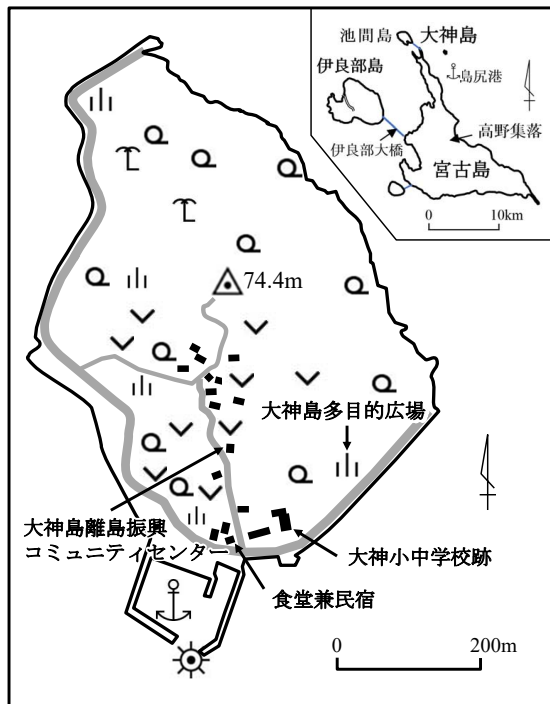


図1 研究対象地域

新沼（2009）は、東京都西多摩郡檜原村 M 集落を研究対象地域とし、2007 年の高齢化率は 51% で、生活環境が厳しい中で、別居子（集落外で居住する子孫）が、村内の中心部からバスで約 40 分、近隣の市からも比較的短時間で駆けつけることができ、高齢の親への支えにもなり、祭りなどの行事においても彼・彼女らの役割が大きいことを挙げている。これは、陸続きではないにもかかわらず、本研究対象地域の大神島大神集落にも該当する。対岸の宮古島に多くの別居子が暮らしており、高齢の親に会いに車と船を乗り継ぎ、比較的短時間で行くことができる。

一方、村田（2015）は、宮城県の南西に位置する七ヶ宿町を構成する 7 地区の一つである湯原を取り上げ、積雪量が多く、高齢化の進んだ地域であるが（2015 年 4 月現在、湯原の約半数の 49.8% が 65 歳以上、3 分の 1 が 80 歳以上で、わずかに限界集落には至っていない）、誰でも参加できるグランドゴルフは交流を主とし、限界集落化した地域生活を再編し、集落内外の「人間関係網」をつなぎ留めたり再生したりするためのひとつとしてのツールに位置付けている。これらのように、限界集落において必ずしも消滅が危惧されている訳

ではない。本稿で取り挙げる大神集落は典型的な限界集落であるが、観光客は増加傾向にある。人口 20 人程度の島で、船便が週に夏季 5 往復、冬季は 4 往復と恵まれ、車を利用すれば宮古島の中心から乗船時間の約 15 分を加えても 40 分程度で宮古島の中心部と結ばれ、地理的な優位性が挙げられる。

ところで、既に堀本（2015）で触れているが、本稿で取り挙げる大神島が含まれる沖縄県の離島に限ると、観光に関する比較的近年の主な研究として次のものがある。医療機関、学校、警察署・交番などの公的機関が整備され、人口規模も大幅に異なるが、宮内（2003）の座間味島、海津・真板（2006）の南大東島、助重（2010）の宮古島、柳田（2012）の西表島を対象とした研究がある。これらの島は、既に一定数の入域観光客数を保っており、この数年間に急激に観光地化した訳ではない。

一方、人口がさらに少ない島の観光を取り挙げた研究として、堀本（2013a）・堀本（2018）がある。人口約 50 人の竹富町鳩間島が急激に観光地化した、その背景には、2005 年に大ヒットしたテレビドラマ「瑠璃の島」放映の影響が大きく、それに加え交通網の整備や宿泊施設の増加、食堂の開業など受け入れ態勢が整ったことが要因であると指摘している。また、鳩間島と人口が同程度の本部町水納島の入域観光客数が一時期減少傾向にあったが、近年再度増加傾向にあるものの急激な増加には至っていない。その他の小規模離島においても、近年急激に観光地化した島はなく、この 10 年以内にそれが顕著な大神島に着目し、研究対象地域とする。

既に、堀本（2013b）で、2012 年 8 月に大神島の全住民を対象とし調査を実施したが、2013 年 4 月に、島内で食堂兼民宿が開業したことを機会に再度調査を実施した。季節により観光客数や客層が異なる可能性があるため、食堂兼民宿開業後、四季を経過した 2014 年 8 月に、2012 年の質問項目に「食堂兼民宿開業後の変化」に関する項目を加えて実施した。食堂兼民宿のメインは、開業当初から郷土料理（タコを燻製にしたカーキたこ丼）を含めた食事で、一方水回り共同の民宿は 6 畳 2

間だけだが、こちらもリピーターを中心に利用者が増えている<sup>3)</sup>。

堀本（2015）によると、2012年、2014年ともに観光客の減少を望む回答は全くなく、住民は観光客に好意的であることを指摘している。その後も入域観光客数が増え続けた状況で、観光に対する住民意識を把握するため、2018年9月に3度目の住民の観光に関する調査を実施した。

研究目的は、観光客の増加に肯定的か否か、2013年に開業した食堂兼民宿に対する住民意識などについて、2014年と2018年の調査結果における変化の有無と、変化がある場合はその要因について考察することである。

なお、本研究において、観光客に対してインフォーマルな聞き取りを行っているが、データ化はしていない。それは、季節、曜日、時間帯、天候などにより客層が異なること、全数調査は言うまでもなく、いつ来るか分からない観光客に対して無作為抽出を行うことも不可能だからである。もちろん、観光客を対象に調査を行うことにも意義はあるが、いかなる手法を用いても、被調査者の層に偏りが生じることは否めない。

ところで、堀本（2015）において、既に2014年の調査結果を報告しているが、今回は2014年と2018年の調査結果の比較を行うことを目的としているため、既存の筆者の論文引用を多く用いることとした。

## II. 研究対象地域の概要と入域観光客数の推移

大神島は、宮古島の北に位置する島尻港から、約5kmのところにある最高峰が75m弱の三角錐の形をした島である。民家の多くは坂道を約250m登った山の中腹にあり、さらに上ると最高地点にある遠見台から、宮古島や池間島を見渡すことができる。

大神島の人口の推移については堀本（2015）において詳述しているが、1961年の宮古島大野越（現在の高野集落）などへの移住政策により減少し、その後一旦島に残った長男夫婦による出生で維持していたが、1970年代後半から島外へ仕事を求め、進学等により再度人口減少が顕著になった。近年は、高齢の夫婦または高齢者が1人で居住してい



写真1 食堂兼民宿  
(2018年筆者撮影)

る場合がほとんどで、人口の減少の割には世帯数の減少率は緩やかである（1975年27世帯、2014年16世帯、2018年14世帯）。

なお、本研究では、主たる居住地が大神島の人（2014年は27人、2018年は21人）を調査対象者とした<sup>4)</sup>。

多くの住民は、わずかの耕地に主に自家消費用の野菜を栽培し、中には魚介類を獲る人もおり、食料はかなり自給できている<sup>5)</sup>。

既に、小学校は2005年度、中学校は2007年度をもって休校となり（その後廃校）、島の公的施設は、大神島離島振興コミュニティセンターのみで、島の行事やデイサービスの会場になっている。2015年まで売店が1軒あったものの観光客が食事をする所もなく困っていた姿を目の当たりにしてきた定年退職後のUターン者により、2013年に食堂兼民宿が開業した<sup>6)</sup>（写真1）。島内唯一の売店の閉店後、食堂で簡単な日用雑貨の販売も開始した<sup>7)</sup>。

大神島は名前のとおり神の島で、島内には多くの御嶽があり、祭祀も行われ立ち入り禁止地域がある。また、旧暦6月～10月にかけて毎月4日から5日間連続して「ウヤガン」と呼ばれる神女達が山籠もりをする祭祀が行われているが、その内容は集落内の人々にも秘されている<sup>8)</sup>。ウヤガンも年々減少し2018年9月現在1人になった<sup>9)</sup>。

ところで、本稿では大神島への乗船客数を入域観光客数とする。その理由は、観光客以外にも用事で来島する人、出身者の帰島などが含まれ、純

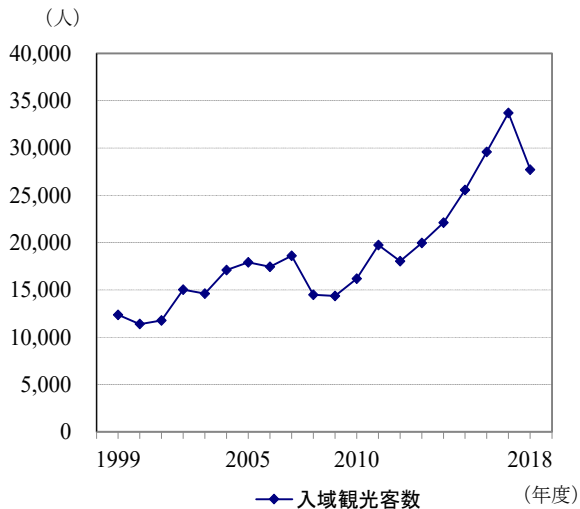


図2 大神島の入域観光客数の推移  
(『離島関係資料』各年度より作成)

粹に観光客だけを抽出することは統計上不可能なためである。

大神島の入域観光客数の推移は、図2のとおりである。2000年度以降は、緩やかな離島ブームのため増加傾向にあった。しかし2007年度末、島内で唯一の中学生の転出により休校となり<sup>10)</sup>、10人近い教職員の宮古島からの通勤、学校行事へ島外からの訪問、学校への用事で来島する人もいなくなり、翌2008年度は入域観光客数が激減した。仮に、大型工事が長期間島内で行われると、宮古島からの通勤者により入域観光客数の増加が考えられるが、筆者が別のテーマで大神住民を対象に調査を開始した2008年度以降は、休校による減少以外に入域観光客数の大きな変化をもたらす事例はみられない。

大神島の入域観光客数は、2010年度から増加が顕著になったが、2012年度は一旦減少した。その要因として、複数のLCCの運航開始の影響が考えられる。宮古島までのその運航はなく、成田空港や関西空港から那覇空港までのようにLCCのみの利用で往来できる観光地が好まれた可能性がある。

島内に食堂兼民宿が開業した2013年度は、再度入域観光客数が19,950人と増加し、2014年度22,097人、2017年度33,712人、2018年度は27,716人である。2018年度の減少要因として、前年度の2017年度は2013年度の1.69倍となり、この数年間の急増による反動が考えられる。

また、天候の影響について、宮古島市のデータを分析した。その結果、観光客が比較的多い5月から10月および1年間をとおして雨天の日数(毎日12時における)は、2017年度は、5月から10月までが16日、1年間では29日に対し、2018年度は、5月から10月までが27日、1年間では37日と増加し、特に観光客が多く訪れる5月から10月まで雨天の日が多く、大神島の観光を見送った人がいくらか増えたことが考えられる<sup>11)</sup>。また、大神島へ行くために必ず経由する宮古島は、近年「宮古バブル」とよばれ急激に入域観光客数が増加しており、たまたま2018年度の宮古島への観光客数の変動により大神島のその減少を説明することもできず、2019年度以降の大神島の入域観光客数に着目していきたい。

ところで、2019年10月下旬に大神島を訪問した際、船はほぼ満席であった。定員の30人を超えるとピストン運航をするが、行きはともかく、帰りは宮古空港から飛行機を乗り継ぐ人もおり、混雑する時期は予約制にするか検討中である<sup>12)</sup>。

### Ⅲ. 調査方法と回答者の属性

今回、増加を続けている観光客に対する住民の考え方を把握するため全数調査を実施した。これは、堀本(2013b)・堀本(2015)・堀本(2018)と同様の手法である。

調査は、2014年8月と2018年9月に、住民票の有無ではなく主たる居住地が大神島の人を調査対象者とした<sup>13)</sup>。

その結果、2014年は、16世帯27人のうち、療養中の1人を除く26人から回答を得(有効回答率約96%)、2018年は、14世帯21人のうち、療養中の1人を除く20人から回答を得た(有効回答率約95%)。本稿で取り上げる属性以外の質問は、2014年、2018年ともに、唯一選択肢を設けた「大神島の今後の観光客数はどのようになればよいとお考えになりますか。」の回答項目は、「観光客は増加した方がよい。」、「観光客は今より少し増加した方がよい。」、「観光客は今くらいがよい。」、「観光客は減った方がよい。」、「観光客はいない方がよい。」の5つである。

それ以外の質問は、自由回答(複数回答可)とし、



表1 回答者の年代

	2014年		2018年	
	男性	女性	男性	女性
40歳代	2	0	0	0
50歳代	3	1	4	0
60歳代	3	0	1	1
70歳代	0	3	2	1
80歳代以上	7	7	5	6
計	15	11	12	8

2014年は堀本（2015）から引用。  
（聞き取り調査により作成）

表2 回答者の職業

	2014年	2018年
無職・年金	17	14
観光業	3	2
会社員（大神海運）	2	2
農業	1	1
漁業	1	1
水産加工業兼漁業	1	0
雑貨店経営	1	0
計	26	20

2014年は堀本（2015）から引用。  
（聞き取り調査により作成）

「大神島の観光についてどう思われますか。何か考えがありますか。」、「食堂兼民宿ができてどのように変わりましたか。」、「大神島に今必要なものは何だとお考になりますか。それとも今のままでよいでしょうか。」の項目に、2014年は質的調査に留めたが、2018年は「観光客はどのような方が多いと感じられますか。」を加えた。これらの回答の分析にあたり、性別、島外での居住歴の有無による属性比較を試みた。

2014年および2018年の調査方法は、各家庭を訪問し対面調査または調査票を後日回収する方法から、回答者が選んだ。2014年は食堂内にいた3人の比較的若い人にはその場で記載してもらい、その他の人には質問用紙を見せながら、口頭で質問項目を読み上げ筆者が回答用紙に記載し（23人）、2018年は7人が後日回収する方法で残る13人は前回と同様の対面調査を行った。なお、両年とも集計結果は個人が特定できないように行う旨回答者へ事前に伝えた。

回答者の年代は、表1のとおりで高齢者が多く、最年少は2014年は40歳代、2018年は50歳代である。病気療養中のため回答を得られなかった人を加えると、2014年27人、2018年21人で僅か4年間に6人減少している。8人が島にいなくなり、2人が転入したが、両年とも回答があった人は18人で、2018年の回答者20人とほとんど変わらないため、両年回答をいただいた18人のみを取り挙げた比較は行わない。

次に、回答者の職業は、表2のとおり無職・年金

受給者が過半数である。有職者が少ない中、観光業（食堂が中心だが、被調査者の回答どおり、民宿に加え、観光ガイドも兼務しており観光業とする）や、船会社である大神海運は雇用の場としての役割りも大きい。

また、大神島での通算居住期間（以下、居住期間とする）は、2014年は70年以上が26人中16人、2018年は20人中12人（島外での居住歴のない人は、2014年は14人、2018年は8人）である。なお、大神島出身者や、長年該当者はいないが島外出身の配偶者、親戚（例えば親の片方が大神島出身）以外の居住者は、宮古島・大神島間の定期船がなかった頃の教職員である。定期船の運航が開始した1977年以降、宮古島から通勤する人と大神島に居住する人が、しばらくは両方いたようである<sup>14)</sup>。その他に、例外として学校存続に寄与した沖縄島（以下、沖縄本島とする）から移住した家族の唯一の例がある。

ところで、回答者の島外での主な居住地については、2014年は、宮古島9回答（計18回答：複数回答有）、2018年は、宮古島7回答（計19回答：複数回答有）である。宮古島以外に、2014年は、池間島1、沖縄本島4、県外3、南方海洋（船員）が1回答、2018年は、池間島2、沖縄本島2、南大東島1、県外4、南方海洋（船員）が3回答で、大神島からみて経済や交通の中心となる宮古島との繋がりが深いことが分かる。

住民の属性については、2014年、2018年ともに、単身でUターンする人が男性に多いため多少差が

表3 属性比較（性別・年代・島外居住歴・職業）

		性別		年代		島外居住歴		職業		N (人)
		男性	女性	80歳以上	80歳未満	有	無	有	無職	
性別	男性	—	—	5	7	10	2	5	7	12
	女性	—	—	6	2	2	6	1	7	8
年代	80歳以上	5	6	—	—	4	7	0	11	11
	80歳未満	7	2	—	—	8	1	6	3	9
島外居住歴	有	10	2	4	8	—	—	6	6	12
	無	2	6	7	1	—	—	0	8	8
職業	有	5	1	0	6	6	0	—	—	6
	無職	7	7	11	3	6	8	—	—	14

(聞き取り調査により作成)

みられる（表1）。また、2018年において、島外居住歴を有する人も男性に多く（表3）、最も若い50代4人は全て男性で（表1）、有職者も6人中5人が男性である（表3）。すなわち、島外から、早期にUターンした男性が職業に就いている場合が多い。

なお、属性比較については、回答数が少ないことに加え、2014年は性別と島外居住歴の有無のみを取り挙げており、今回も2014年と同様の手法を用いる。

#### IV. 調査結果

##### 1. 大神島の今後の観光客数

「大神島の今後の観光客数はどのようになればよいとお考えになりますか。」の質問を行った。

2014年の調査結果は、表4のとおりである。観光客の増加と今くらいの回答にほぼ二分された。当時も、観光客は増加を続けていたが、否定的な回答は全くみられなかった（回答数26）。

2018年の調査結果は、表4のとおりである。2018年も「少し減少」の選択肢を設けていなかったにもかかわらず、回答の中で「今くらい」でもなく「減少」でもなく、少し減少でしょうかとの回答が3みられた。2018年は多くの人「今くらい」と回答し、増加に肯定的な回答は3に減少し、否定的な回答が初めて3みられた（回答数20）。これらの背景には、この4年間で観光客が約1.25倍（2014年度と2017年度を比較すると1.53倍）に増加し、比較基準が異なること、住民との交流や集

落をのんびりと散策する観光客から、シュノーケリング客へと客層が変わったことが挙げられる。

なお、既に堀本（2015）で詳述しているが、本節では堀本の2012年の調査結果にも触れる。本研究の中心的な項目であり、数値での分析が容易であることにもよる。2012年は回答者27人中「増加」が7、「少し増加」が9、「今くらい」が8、「分からない」が3で、分からないの回答を除くと、3分の2の人が、観光客の増加を望んでおり、2014年の比ではない。やはり、この間も観光客が増え続けており、2012年と2014年の基準となる数値が異なることが一要因と思われる。

2014年当時、親子づれで水遊びをしている様子が散見できたが、夏季にもかかわらず本格的なシュノーケリング客はあまり見られなかった。

属性比較に着目すると、2014年は明確な差異はみられなかったが、3回答ながら2018年の観光客の増加に肯定的な回答は、全て島外居住歴を有する男性である。

ところで、近年自然以外に何もない素朴な大神島を訪れ集落をのんびりと散策する観光客から、SNSや口コミなどを通じて来島するリピーターを含めシュノーケリング客が急増している。シュノーケリング客はビーチのそばに更衣室、シャワー室、売店、自動販売機などが一切ないため、やむを得ない面もあるが、集落のほぼ入口に位置する食堂へ「海の家」と同感覚で水着のままで来るなど客層の変化がみられた<sup>15)</sup>。さらに、混雑している食堂へ、買物以外には以前ほど通わなくなった住民

表4 大神島の今後の観光客数はどのようになればよいとお考えになりますか.

		増加	少し増加	今くらい	少し減少	減少	不要	分からない	N (人)
2014年	男性	1	5	7	—	0	0	2	15
	女性	3	2	6	—	0	0	0	11
	合 計	4	7	13	—	0	0	2	26
	島外居住歴有	2	4	5	—	0	0	1	12
	島外居住歴無	2	3	8	—	0	0	1	14
	合 計	4	7	13	—	0	0	2	26
2018年	男性	0	3	8	1	0	0	0	12
	女性	0	0	6	2	0	0	0	8
	合 計	0	3	14	3	0	0	0	20
	島外居住歴有	0	3	7	2	0	0	0	12
	島外居住歴無	0	0	7	1	0	0	0	8
	合 計	0	3	14	3	0	0	0	20

2014 年は堀本（2015）から引用．

（聞き取り調査により作成）

表5 大神島の観光についてどう思われますか．何か考えがありますか．

		観光客 が増えて 賑やかにな ってよい	観光す る場所 がもっと あればよい	豊かな 自然を 活かし た観光	条件付 き受け 入れ (ルール を守る など)	若い人 に任せ たい	島を清 掃して きれい にして きた	どんな 人が来 るか心 配・色 んな人 が来る	気にし ていな い・あ っても なくて もよい	その他	分か らない	N (回答数)	無回答
2014年	男性	4	3	2	1	1	0	0	0	3	6	20	0
	女性	2	1	2	2	2	0	0	0	1	2	12	0
	合 計	6	4	4	3	3	0	0	0	4	8	32	0
	島外居住歴有	3	2	3	1	1	0	0	0	2	3	15	0
	島外居住歴無	3	2	1	2	2	0	0	0	2	5	17	0
	合 計	6	4	4	3	3	0	0	0	4	8	32	0
2018年	男性	0	2	0	3	0	1	0	1	1	1	9	3
	女性	0	0	0	2	0	1	2	1	2	2	10	1
	合 計	0	2	0	5	0	2	2	2	3	3	19	4
	島外居住歴有	0	2	0	4	0	1	0	1	0	1	9	3
	島外居住歴無	0	0	0	1	0	1	2	1	3	2	10	1
	合 計	0	2	0	5	0	2	2	2	3	3	19	4

2014 年は堀本（2015）から引用（ともに複数回答有）．

（聞き取り調査により作成）

もあり、特に、昼間の住民と観光客との交流が減っていることも、観光客の増加に肯定的な回答が減少した一要因と思われる<sup>16)</sup>．

## 2. 大神島の観光について

「大神島の観光についてどう思われますか．何か考えがありますか．」の質問を行った．

2014 年の調査結果は、表 5 のとおりで、「観光

客が増えて賑やかになってよい」、「観光する場所がもっとあればよい」、「豊かな自然を活かした観光」を合わせると14回答みられた。また、その他に含めたが、「観光客の増加は定期船の維持につながる」、「雇用の場の増加」、「観光業の方の問題」、「島全体の収入としては考えられない」が各1回答、「分からない」が8回答である（回答数32、複数回答有）。

2018年の調査結果は、表5のとおりで、最も多い「条件付き受け入れ」の5回答の内訳は、「ルールを守る」、「人の言うことを聞いてくれると嬉しい」、「島に来て悪いことをしなければよい」、「マナーを持って観光をする」、「島の神祭りに支障がない観光」が各1回答である。観光客の受け入れを拒んでいる訳ではないが、住民の生活環境に支障が生じない観光が望まれている。次に、「観光する場所がもっとあればよい」、「島を清掃してきれいにしてきた」、「どんな人が来るか心配・色んな人が来る」、「気にしていない・あってもなくてもよい」が各2回答である。その他に含めたが、「事故がないか心配」、「あまり観光客に会わない」、「若い人がどこまで分かっているのか」が各1回答で、増え続けるシュノーケリング客に事故がないかを心配し、僅かではあるが観光客のことを考えた回答もある。「分からない」が3回答である（回答数19、複数回答有：無回答4）。

2018年は、「条件付き受け入れ」の回答の増加に加え、2014年には回答がなかった「どんな人が来るか心配・色んな人が来る」の2回答のような否定的な回答がみられる。

属性比較に着目すると、2014年は回答が分かれており属性比較は困難だが、2018年は、絶対数が少ないながら、「条件付き受け入れ（ルールを守るなど）」が、20人中12人と居住者数が多いものの、島外居住歴を有する人が5人中4人みられた程度で他にはあまり差異はみられなかった。なお、回答数が2014年の32に対し、2018年は19と回答者数の減少を勘案しても減っている。これは、2014年は観光客のことを考えた回答が多くみられたが（複数回答を含む）、観光客の受け入れに肯定的な回答が減少したためと考えられる。

次節以降も2018年の方が2014年より回答数が

少ないが、その一要因として、対面調査の減少（2014年は26人中23人、2018年は20人中13人）が挙げられる。対面調査の場合、被調査者との会話が進み、回答数が増えることが考えられる。調査の手法による結果への影響の分析は、重要なことと考えられるが、今後の課題としたい。また、2014年は26人中23人が対面調査で、残る3人は筆者もそばにいて島内の食堂で実施したため、全項目で無回答はなかったが、2018年は、20人中7人は後日調査表を回収したため、質問項目によっては無回答のケースがみられた。

### 3. 食堂兼民宿開業後の変化

「食堂兼民宿ができてどのように変わりましたか。」の質問を行った。

2014年の調査結果は表6のとおりで、食堂の開業は、「観光客へ食事の提供」が10回答と最も多く、観光客にとってメリットが大きいことが挙げられる。一方、「住民へ食事の提供」が3回答みられるように大神住民にも急な来客時の利用（配達は無料）など便利になっている。また、島内にコミュニティセンターがあるものの、「住民の憩いの場・癒しの場」が3回答みられるように、食堂も交流の場としての役割も担っている。特に最終便が出航した17時以降は、宿泊客を交えて毎晩数人の住民と懇親会が行われている。その他に含めたが、「郷土料理を食べにくる」、「観光客との交流」、「現金収入」が各1回答みられた（回答数41、複数回答有）。

2018年の調査結果は、表6のとおりで、「住民の憩いの場・癒しの場」が6回答と最も多く、「住民へ食事の提供（2018年は日用雑貨を含む）」が4回答みられるなど、住民にさらに必要不可欠な場所となっている（回答数21、複数回答有：無回答2）。2018年の調査当時、食堂で品揃えは限られているが、食品や日用雑貨の購入が可能になったことも一要因と思われる。「観光客へ食事の提供」は5回答に減少し、2014年は計13回答みられた「観光客の宿の確保」、「観光客の増加」、「賑やかになった」の回答は全くなかった。観光客に対する住民意識が変化し、観光客のことより自分たちの生活を見据えた回答が増えている。

2014年は、観光客は歓迎ムードであったが、



表 6 食堂兼民宿ができてどのように変わりましたか。

		観光客 へ食事 の提供	観光客 の宿の 確保	観光客 の増加	住民の 憩いの 場・癒 しの場	住民へ 食事の 提供	雇用の 場	賑やか になっ た	あまり 変わら ない	その他	分から ない	N (回答数)	無回答
2014年	男性	5	6	3	2	2	2	2	0	1	3	26	0
	女性	5	0	1	1	1	1	1	0	2	3	15	0
	合 計	10	6	4	3	3	3	3	0	3	6	41	0
	島外居住歴有	6	4	2	2	1	2	1	0	1	4	23	0
	島外居住歴無	4	2	2	1	2	1	2	0	2	2	18	0
	合 計	10	6	4	3	3	3	3	0	3	6	41	0
2018年	男性	3	0	0	2	2	0	0	1	2	0	10	2
	女性	2	0	0	4	2	1	0	1	0	1	11	0
	合 計	5	0	0	6	4	1	0	2	2	1	21	2
	島外居住歴有	3	0	0	2	2	0	0	2	1	0	10	2
	島外居住歴無	2	0	0	4	2	1	0	0	1	1	11	0
	合 計	5	0	0	6	4	1	0	2	2	1	21	2

2014 年は堀本（2015）から引用（ともに複数回答有）。

（聞き取り調査により作成）

2018 年は以前ほど観光客への歓迎意欲が減っていると思われる。さらに、「あまり変わらない」が 2 回答、「雇用の場」、その他に含めたが、「今までは島内のお店を聞かれていた」、「自分に関係していない」が各 1 回答である。

属性による差異は、2014 年は、「観光客の宿の確保」の 6 回答全てが男性であるが、表 1 のとおり男性は、女性より年齢層がやや若く、さらに観光業や大神海運勤務などの有職者が多いため（9 人中 7 人）、島外からの観光客に目が向いていると考えられる。2018 年は回答数そのものが少ないこともあり属性による著しい差異はみられなかった。

以上のように、両年とも食堂や民宿の開業には、ほとんどの住民は肯定的である。なお、回答数は 2014 年の 41 に対し、2018 年は 21 と回答者数の減少を勘案しても減っている。これは、食堂兼民宿が開業した翌年は、観光客のことを考えた回答が多かったが（複数回答を含む）、前節と同様に観光客の受け入れに肯定的な回答が減少したため、さらに前述のとおり、対面調査による回答の比率が減ったため回答数も減少したと考えられる。

#### 4. 観光客の特徴

「観光客はどのような方が多いと感じられますか。」の質問について、2014 年は質的調査に留めたが、全数調査の必要性を感じ 2018 年は質問項目に取り挙げた。その結果、「海水浴客」、「シュノーケリング客」、「若い人」が各 3 回答、「家族連れ」および「色々な人」が各 2 回答、その他に含めたが、「夏は若者で冬はお年寄り」、「関西の人が多い」、「きれいな海を楽しむ人」、「島のガイドを利用する人」、「大きな声がすると分かるが静かに観光客が廻っていると気づかない」が各 1 回答、「分からない」が 5 回答である（表 7）、（回答数 23、複数回答有：無回答 4）。このように、海水浴やシュノーケリングをするため、家族連れや若い友人同士で訪れる場合が多いと考えている人が多いことが分かった。筆者が訪問した 2018 年 9 月および 2019 年 10 月もシュノーケリング客が多く、2018 年 12 月は曇天の中でもシュノーケリング客が散見できた。

属性による差異は、絶対数が少なく分析が困難な中、全て 3 回答ながら、「海水浴客」、「シュノーケリング客」、「若い人」の回答は、島外居住歴を有する人である。また、「分からない」の回答を除

表 7 観光客はどのような方が多いと感じられますか。

		海水浴客	シュノーケリング客	若い人	家族連れ	色々な人	その他	分からない	N (回答数)	無回答
2018年	男性	2	1	2	0	2	3	2	12	3
	女性	1	2	1	2	0	2	3	11	1
	合 計	3	3	3	2	2	5	5	23	4
	島外居住歴有	3	3	3	1	1	4	1	16	2
	島外居住歴無	0	0	0	1	1	1	4	7	2
	合 計	3	3	3	2	2	5	5	23	4

複数回答有。

(聞き取り調査により作成)

表 8 大神島に今必要なものは何だとお考えになりますか。それとも今のままでよいでしょうか。

		今のま ま でよい	出身者 の帰島	団地・ 住宅	仕事・ 産業	品揃え豊 富な売店	皆が集ま る・島の 情報を発 信できる 場所	その他	分から ない	N (回答数)	無回答
2014年	男性	5	0	2	2	1	0	4	2	16	0
	女性	4	3	1	1	0	0	3	2	14	0
	合 計	9	3	3	3	1	0	7	4	30	0
	島外居住歴有	2	1	0	3	1	0	4	2	13	0
	島外居住歴無	7	2	3	0	0	0	3	2	17	0
	合 計	9	3	3	3	1	0	7	4	30	0
2018年	男性	4	0	0	0	0	3	4	0	11	3
	女性	3	1	1	0	1	0	3	1	10	1
	合 計	7	1	1	0	1	3	7	1	21	4
	島外居住歴有	3	0	0	0	0	3	5	0	11	3
	島外居住歴無	4	1	1	0	1	0	2	1	10	1
	合 計	7	1	1	0	1	3	7	1	21	4

2014 年は堀本（2015）から引用（ともに複数回答有）。

(聞き取り調査により作成)

くと、島外居住歴を有する人からは 15 回答、島外居住歴の無い人からは 3 回答で、前者は 12 人、後者は 8 人で回答者数を勘案しても属性による回答数の違いが明確である。表 3 のとおり、島外居住歴を有する人は比較的若く、全ての有職者が含まれ、行動範囲が広く、観光客の様子を把握している人が多いと思われる。

## 5. 大神島に今必要なもの

最後に、「大神島に今必要なものは何だとお考えになりますか。それとも今のままでよいでしょうか。」の質問を行った。観光とは直接関係性を見いだせないように思えるが、2014 年と同様に大神住民は今何を必要としているのか、それとも今のままでよいのかについて考察することにより観光を含めた住民意識の把握が可能かと考え、この 4 年

間の変化の有無とその要因について考察を行う。

2014 年は「今のままでよい」が 9 回答、次いで、「出身者の帰島」、「団地・住宅」、「仕事・産業」が各 3 回答で島の発展を望む回答がみられた（表 8）。ただし、「団地・住宅」については、公営住宅は一定の基準を満たせば抽選のため大神島出身者以外の入居も可能となり、原則として移住者を受け入れない大神島で、それを受け入れることとなる<sup>17)</sup>。さらに、「品揃え豊富な売店」、その他に含めたが、「観光名所」、「若者」、「学校」、「緊急時の対応」、「介護可能な老人施設」、「坂道に溝があり手すりが必要」、「若い人に任せる」が各 1 回答、「分からない」が 4 回答みられた（回答数 30、複数回答有）。

2018 年は、「今のままでよい」が 7 回答、次いで、「皆が集まる・島の情報を発信できる場所」が 3 回答みられた。さらに、「出身者の帰島」、「団地・住宅」、「品揃え豊富な売店」が各 1 回答、その他に含めたが、「食堂の売店や自治会の移動販売および配達」の継続、「急病人が出た時のための診療所・医療関係者」、「清掃時等に、より多くの人手」、「ゴルフ場で利用されていたカート（船の送迎や祭の時に使用）」、「何かあった方がよい」、「人」、「特に考えはない」が各 1 回答、「分からない」が 1 回答みられた（回答数 21、複数回答有：無回答 4）。

2014 年に多くみられた島の発展より、2018 年は生活環境の整備や維持を望む声が増えている。その背景には、住民のさらなる高齢化もあり、身近なことに目が向いていると考えられる。

属性による差異は、最も多かった回答の「今のままでよい」は、居住歴による差異がみられ、島外居住歴の無い人の回答が多く、2014 年は 9 回答中 7 回答（26 人中島外居住歴の無い 14 人のうち）で、2018 年は 7 回答中 4 回答（20 人中島外居住歴の無い 8 人のうち）である。3 回答ながら、2018 年の「皆が集まる・島の情報を発信できる場所」は、島外居住歴を有する男性であった。これは、夕方以降、宿泊客の有無にかかわらず毎晩食堂で開催される懇親会に、仕事の後に参加することを楽しみにしている有識者が多いからである。

## V. おわりに

本稿では、大神島における観光に対する住民意

識について、2014 年と 2018 年の比較を行った。

2014 年は、観光客の受け入れに前向きであったが、2018 年は観光客の減少を望む回答がみられた。それは観光客が増加し、比較基準が異なること、住民との交流も比較的あった素朴な観光客から、シュノーケリングを目的とした観光客へ、客層が変化したことが要因であることが分かった。属性比較については、回答数が少なく、2018 年に限れば男性の方が多少観光に積極的なことが明らかになった。その一要因として、食堂兼民宿や大神海運で働く人は全て男性で、仕事柄観光客と直接会う機会が多いことが挙げられる。また、食堂の開業については、観光客にとって便利になっただけでなく、住民にとっても急な来客時の利用（無料配達を含む）や、簡単な日用雑貨の販売、さらに憩いの場としての役割を担っていることが明らかになった。

この 4 年間の大きな変化は、入域観光客数のさらなる増加、人口が 27 人から 21 人まで減少し、島内唯一の売店がなくなり、その後食堂兼民宿で簡単な日用雑貨の販売を開始したこと、行政から補助を受け週 1 回程度で不定期であるが生鮮食料品を含め大神島離島振興コミュニティセンターで販売を開始し、依頼があれば無料で配達していることである。

ところで、限界集落でかつ小規模離島である大神島大神集落への入域観光客数が増加している背景には、宮古バブルと呼ばれる宮古島への関心の増加、郷土料理が手頃に食べられる食堂の開業、架橋され観光スポットである美しい景観の伊良部島や近隣の池間島などとの周遊が容易なこと、大神島の山頂からの景観、美しい海、波により浸食されてできたノッチと呼ばれる岩（写真 2）など自然に恵まれていることが挙げられる<sup>18)</sup>。

現在、何とか人口 21 人を維持できている背景には、日用雑貨の購入が可能なこと、入域観光客の増加もあり週に夏季 5 往復、冬季 4 往復の船便が台風の時以外は欠航することはほとんどなく、安定供給されていること、少ないながら就業先があるため、数人ではあるが比較的若い住民が、必要に応じ坂道の上にある高齢者の自宅と港まで荷物とともに、ゴルフ場で使用されていたカートで送



写真2 波により侵食されてできたノッチ  
(2018年筆者撮影)

迎するなどの支援を行っているからである。現在も、月1回のデイサービスが島内で行われ、対岸の集落からヘルパーの利用が可能であることなど利便性の向上、そして何より宮古島に居住する多くの別居子の存在が大きく、宮古島と大神島の往来が比較的容易で、家族訪問はもとより島の行事にも積極的に参加・運営していることも大きな要因である。

最後に、住民と同様に筆者も食事や日用雑貨の販売だけでなく、コミュニティの場としても食堂の継続を望みたい。人口減少が進む大神島であるが、いつまでもゆっくりと時間が流れ、豊かな自然を保った島であり続けて欲しい。

本研究を行うにあたり、突然の訪問にも関わらず、大神住民(2014年は26人、2018年は20人)に調査にご協力いただき感謝いたします。さらに、別のテーマで2008年に大神島をフィールドに調査を開始した当時の区長の島尻氏、次の区長の友利氏をはじめこの10年余りにわたる4代の区長、さらに住民の大浦氏および久貝ご夫妻をはじめ多くの方々から調査項目だけでなく、島の歴史、産業、観光客の特徴、小中学生が多く在籍学校が賑わっていた頃の様子を含め、貴重なお話を聞かせていただきました。さらに、見知らぬ調査者である筆者に対し、多くのおもてなしをいただき重ねて御礼申し上げます。大神住民からの「おもてなし」については、堀本(2013c)をご参照いただければ幸いです。また、終始きめ細かなご指導をしていただきました琉球大学名誉教授の島袋伸三先生に御礼申し上げます。

現在、新型コロナウイルスの影響で観光客の減少が予想され、2020年度は入域観光客数および食堂や民宿の利用者数も一変するかも知れない懸念がある中で、今までの大神島を取り戻す日が早く来ることを願ってやまない。

なお、本研究の骨子は、東北地理学会で2019年5月19日および日本島嶼学会で2019年10月26日に発表を行った。

## 注

- 1) 大野(2008)による。
- 2) 大神住民A氏による(2008年9月)。
- 3) 大神住民B氏による(2018年9月)。
- 4) 2014年は前掲2) A氏および大神住民C氏による(ともに2014年8月)、2018年は前掲3) B氏およびC氏による(ともに2018年9月)。またC氏によると、人口の減少は著しい一方、戸数の減少が少ない要因として、子どもは1家に8人から10人いうことは珍しくなく、子どもが島を出ていき、親のみが島で居住しているケースがほとんどである(2008年9月および2014年8月)。
- 5) 前掲2) A氏および前掲4) C氏による(ともに2008年9月)。
- 6) 前掲3) B氏による(2014年8月)。
- 7) 前掲3) B氏による(2014年8月)。
- 8) 大神島のウヤガンについては、三上(2005)および川田(2009)に詳述されている。
- 9) 前掲4) C氏によると、現在祭祀は、唯一の現役のウヤガンのほかに引退した元ウヤガンや、第一線に出ることができない男性の協力者がおり何とか維持できている。ただし、ウヤガンも高齢で、今後の継続が懸念されている(2018年12月)。
- 10) 詳しくは、堀本(2010)を参照いただきたい。
- 11) 各年の天気情報は、「goo 天気宮古島の過去の天気」による。2017年は<https://weather.goo.ne.jp/past/927/20170700/>、2018年は<https://weather.goo.ne.jp/past/927/20180700/>、2019年は<https://weather.goo.ne.jp/past/927/20190400/>による(いずれも2020年4月20閲覧)。
- 12) 大神住民D氏による(2019年10月)。別のテーマで大神住民を対象に調査を開始した2008年および2009年頃は、乗船客は筆者1人だけのことが何度かあったが、定期船が安定して運航され続けた。前掲2) A氏によると、大神海運が国庫補助・地方補助の航路に指定されており、赤字部分の補填を受けていることによる(2008年9月)。なお、2020年に大神海運は株式会社となった(大神島出身で宮古島在住のE氏による(2020年7月))。
- 13) 前掲3) B氏および前掲4) C氏による(ともに2014年8月および2018年9月)。なお、C氏によると、2014年および2018年ともに、日曜日のみ宮古島から帰省する人がいるが、主たる居住地が島外であるため人口に含めていない(2014年8月および2018年9月)。
- 14) 前掲12) E氏によると、1977年の大神島宮古島間の定



期航路の開通後もしばらく一部の教職員は大神島に居住していた様子であるが、はっきりと何年までかは分からない(2020年7月)。一方、大神住民F氏によると、定期航路の開通後は宮古島から通勤していたようで、その他にも複数の大神住民に聞き取りを行ったがはっきりした回答は得られなかった。なお、宮古島市教育委員会でも詳細は明らかではない(2020年7月)。少なくとも定期航路の開通後の教職員の大神島居住者は、短期間でかつ少人数であったと思われる。

- 15) 大神住民G氏および大神住民H氏による(ともに2018年9月)。
- 16) 前掲4) C氏による(2018年9月)。
- 17) 宮古島市役所の関係団体所属のI氏による(2018年9月)。
- 18) 前掲3) B氏, 前掲4) C氏, 前掲14) F氏による(全て2018年9月)。

## 文 献

- 大野 晃(2008):『限界集落と地域再生』北海道新聞社。
- 沖縄県企画開発部編(2001～2008):『離島関係資料』沖縄県企画開発部。
- 沖縄県企画部編(2009～2020):『離島関係資料』沖縄県企画部。
- 海津ゆりえ・真板昭夫(2006):島嶼における住民参加による自律的観光を通じた地域活性化と発展モデルの研究。京都嵯峨芸術大学紀要, 31, 21-28。
- 川田 桂(2009):沖縄宮古島のウヤガン信仰——大神島を中心に。名古屋大学人文科学研究, 38, 99-107。
- 助重雄久(2010):宮古島市における小規模宿泊施設の急増と多様化。平岡昭利編著:『離島研究IV』海青社, 125-140。
- 新沼星織(2009):「限界集落」における集落機能の維持と住民生活の持続可能性に関する考察——東京都西多摩郡檜原村M集落の事例から——。E-Journal GEO, 4 (1), 21-36。
- 堀本雅章(2010):小規模離島における学校の役割と住民意識——沖縄県宮古島市大神島の事例——。法政地理, 42, 9-20。
- 堀本雅章(2013a):竹富町鳩間島における島民意識と観光の特色。沖縄地理, 13, 49-60。
- 堀本雅章(2013b):宮古島市大神島島民の観光に対する意識調査。沖縄地理, 13, 79-84。
- 堀本雅章(2013c):調査者に優しい宮古島市大神島民のおもてなし。沖縄地理学会会報, 58, 12-13。
- 堀本雅章(2015):沖縄県宮古島市大神島における観光地化と島民意識。法政地理, 47, 43-59。
- 堀本雅章(2018):沖縄県竹富町鳩間島における「瑠璃の島」放映後の観光に対する住民意識。季刊地理学, 70(1), 1-16。
- 三上智恵(2005):大神島の祭祀組織についての一考察——ライフヒストリーと二つの成巫過程を中心に。地域文化論叢, 7, 49-79。
- 宮内久光(2003):座間味島の観光地化と県外出身者の存在形態。平岡昭利編著:『離島研究』海青社, 71-92。
- 村田周祐(2015):限界集落におけるスポーツによる地域づくりの社会的機能・特性に関する実証的研究 宮城県七ヶ宿町における三宿グランドゴルフ大会を事例に。笹川スポーツ研究助成研究成果報告書, 171-179。
- 柳田理沙(2012):西表島カヌー観光業の成立と展望に関する研究。目白大学総合科学研究, 8, 113-125。

(受付 2020年5月14日)

(受理 2020年10月23日)